2020 年 5 月 24 日（日）「欲望の先にあるもの」

《聖書協会共同訳》コヘレト 2:1-11

1 私は心の中で言った。
「さあ、喜びでお前を試そう。幸せを味わうがよい。」しかし、これもまた空であった。
2 笑いについては、「馬鹿げたこと」と私は言い、また喜びについては「それが何になろう」と言った。
3 私はぶどう酒で体を元気づけようと心に決めた。私は知恵によって心を導くが、しかし、天の下、人の子らが短い生涯に得る幸せとは何かを見極めるまで、愚かさに身を委ねることにした。
4 私は事業を広げ、自分のために邸宅を建て、ぶどう園を造った。
5 庭園や果樹園をしつらえ、あらゆる果樹を植えた。
6 池を掘り、そこから水を引いて、木々の茂る林を潤した。
7 私は男女の奴隷を買い入れた。
家で生まれた奴隷もいた。かつてエルサレムにいた誰よりも、多くの牛や羊の群れを所有した。
8 自分のために銀や金、王たちと諸州の財宝を集めた。
自分のために男女の歌い手をそろえ、人の子らが喜びとする多くの側女を置いた。
9 かつてエルサレムにいた誰よりも、私は偉大な者となり、栄華を手に入れ、知恵もまた私にとどまった。
10 目が求めるあらゆるものを、私は手中に収めた。
私はすべての喜びを享受し、心はすべての労苦を喜んだ。これがすべての労苦から得た私の受ける分であった。
11 だが、私は顧みた。すべての手の業と労苦を。
見よ、すべては空であり、風を追うようなことであった。太陽の下に益となるものはない。

《新改訳 2017》伝道者の書 2:1-11

1 私は心の中で言った。「さあ、快楽を味わってみるがよい。楽しんでみるがよい。」しかし、これもまた、なんと空しいことか。
2 笑いか。私は言う。それは狂気だ。快楽か。それがいったい何だろう。
3 私は心の中で考えた。私の心は知恵によって導かれているが、からだはぶどう酒で元気づけよう。人の子がそのいのちの日数の間に天の下ですることについて、何が良いかを見るまでは、愚かさを身につけていよう。
4 私は自分の事業を拡張し、自分のために邸宅を建て、いくつものぶどう畑を設け、
5 いくつもの庭と園を造り、そこにあらゆる種類の果樹を植えた。
6 木の茂った森を潤すためにいくつもの池も造った。
7 私は男女の奴隷を得、家で生まれた奴隷も何人もいた。私は、私より前にエルサレムにいただれよりも、多くの牛や羊を所有していた。
8 私はまた、自分のために銀や金、それに王たちの宝や諸州の宝も集めた。男女の歌い手を得、人の子らの快楽である、多くの側女を手に入れた。
9 こうして私は偉大な者となった。私より前にエルサレムにいただれよりも。しかも、私の知恵は私のうちにとどまった。
10 自分の目の欲するものは何も拒まず、心の赴くままに、あらゆることを楽しんだ。実に私の心はどんな労苦も楽しんだ。これが、あらゆる労苦から受ける私の分であった。
11 しかし、私は自分が手がけたあらゆる事業と、そのために骨折った労苦を振り返った。見よ。すべては空しく、風を追うようなものだ。日の下には何一つ益になるものはない。

【序論】

新型肺炎感染拡大防止を目的とした政府からの自粛要請により、日本におきましても広く行動が制限されてきました。インターネットが普及している時代だからこそ、このような形での礼拝が実現しているのですが、それでも今まで当たり前に顔を合わせていた人に会えないという現実は、人間らしい生活をどこか忘れさせているように思います。そんな状況下にあって、人間は「笑い」というものを求めるのではないでしょうか。私は普段あまりテレビを見ないのですが、好きな娯楽番組はいくつかあるにはあります。日曜日の奉仕を終えて自宅に帰ったら、「世界の果てまでイッテ Q」を子どもたちと一緒に見るのが好きです。「モニタリング」や、Eテレの「わらたまドッカ〜ン」も面白い番組です。戦時中にも漫才やお笑いが果たした役割は重要であったといいます。笑えないときに無理にでも笑いを提供してくれる人がいる。それによって、ほんの一瞬でも笑顔をつくることができる。今の状況下にあっても同様のことが言えるのではないでしょうか。生活が制限されストレスを覚えるところに、画面上で「笑い」を求める（楽しみの疑似体験をする）。とはいえ、撮影のために人が集まることさえできないので、過去の番組が再放送されてばかりの昨今であります。そういう中、YouTube でどんどん配信をしている人たちもいて、その柔軟性はすごいと思わされます。我が家の子どもたちも、友だちと直接会うことができないので、オンラインでゲームをやって通じ合ったり、それはそれで一つの役割を果たしてくれているのではないか。

さて、今日はこの「笑い」について、コヘレトの言葉から考えてまいります。私自身は「笑い」や「娯楽」を否定してはいないのですが、コヘレトは結論としてそれを「空（無意味）」とみなします。彼の見解に耳を傾けてみましょう。

【本論】

本論１．喜びと幸せで自らを試す

> **私は心の中で言った。「さあ、喜びでお前を試そう。幸せを味わうがよい。」しかし、これもまた空であった。**（2:1）

１章でコヘレトは、「知恵」をもってしてもこの世の問題を解決することができないジレンマに陥り、「空（くう）」と評しました。では、「喜び」はどうか。その議論はこれから始まっていくのですが、のっけから「空」という結論が置かれてしまっています。「**喜び**」と訳された言葉を調べてみますと、原文では「שִׂמְחָה（シムハー）」という語が使われて

いることが分かります。文字通りには「喜び」「陽気」「笑い」といった意味になりますが（ガハハという空騒ぎ的な雰囲気も含まれる）、新改訳では「快楽」という訳が採用されています。「快楽」と聞くと、読者には官能的なイメージが強く残るのではないでしょうか。それも確かに部分的に含まれてはいますが、４節以下を読むと「喜び」の内容は多岐に亘っていることが分かります（「贅沢、官能、名誉」とまとめられるでしょう → これを俗な言い方に換えてみると「金と名誉と女」となるか）。コヘレトは、これらの人間の基本的な欲望に身を任せたらどうなるのか、身をもって試してみようと考えたのです（著者はソロモンの人生からその結果を引き出そうとしている）。

「**幸せ**」という言葉は原文では「**טוֹב**（トーブ）」で、基本的な意味は「良い」ですが、「喜び」「幸せ」と訳すこともできます。どちらかと言うと、「幸せ」の方が「喜び」よりも心の深みを感じさせるかもしれません。

笑いについては、「馬鹿げたこと」と私は言い、また喜びについては「それが何になろう」と言った。（2:2）

今度は「笑い」（שְׂחוֹק／セホーク）という単語が出てきました。この言葉には「嘲り」という意味も含まれていて、「美しい笑い」ではない感じがします。実（じつ）のない笑いと言いますか、嫌なことを忘れるためにゲラゲラ笑ってその場をしのぐようなものでしょう。酔っ払いの馬鹿騒ぎというのは、シラフの人にとってはただやかましいばかり。そういう生活にいそしみながら、同時に冷めた目で自分を眺めている著者がおります。一時的な慰みとして浮かれさわぐことは、馬鹿げていて（新改訳：「狂気」）、何の役にも立たないものだ。それは現実を直視することから逃げているにすぎないと。

私はぶどう酒で体を元気づけようと心に決めた。私は知恵によって心を導くが、しかし、天の下、人の子らが短い生涯に得る幸せとは何かを見極めるまで、愚かさに身を委ねることにした。（2:3）

欲望に身を委ねることは愚かだと分かっていながら、その道を進み続けたらどうなるのかを実験してみるとコヘレトは言います。しかし、「**知恵によって心を導く**」という条件が付いている。難しいことですが、愚かに振る舞う自分を第三者的に見ている自分もいるという、一種の「自己分裂的な状態」で過ごすということです。著者は、ソロモンがその人生において証明したことだと言っているのでしょう。では、なぜソロモンはそうしたのか。そもそも、欲望に身を委ね続けることが可能な人間などほとんどいません。なぜなら、欲望を実現するためにはそれなりの財力が必要だからです。４節以下で見ていく内容は、大金持ちでなくては絶対にできないこと、一般人には到底手の届かないことです。つまり、それができる人ができない人々に代わってやって見せたということなのでしょう。欲望を満たし続けるところに答えはあるのか。その先には何があるのか。

本論２．ソロモンの経験

> **私は事業を広げ、自分のために邸宅を建て、ぶどう園を造った。庭園や果樹園をしつらえ、あらゆる果樹を植えた。池を掘り、そこから水を引いて、木々の茂る林を潤した。私は男女の奴隷を買い入れた。家で生まれた奴隷もいた。かつてエルサレムにいた誰よりも、多くの牛や羊の群れを所有した。自分のために銀や金、王たちと諸州の財宝を集めた。自分のために男女の歌い手をそろえ、人の子らが喜びとする多くの側女を置いた。かつてエルサレムにいた誰よりも、私は偉大な者となり、栄華を手に入れ、知恵もまた私にとどまった。**（2:4-9）

ここでは「喜び」のために試みたことが次々と列挙されていきます。これを私なりに整理してみました。

①贅沢
- 事業拡大、邸宅建設（４節）
- 庭園と果樹園（５節）
- 池と水路（６節）
- 男女の奴隷（７節）
- 牛や羊（７節）
- 金銀、財宝（８節）

②官能
- 歌い手と側女（８節）

③名誉
- 栄華と知恵（９節）

この箇所で特徴的なのは、「自分のために（לִי／リー）」という前置詞が８回も繰り返されていることです[1]。日本語にはいちいち訳しきれませんが、原文では自分の欲望を満たすためにやりたいことを一つひとつ実現していったことが、うるさいほど表現されています。とことん自分を喜ばせてみよう。そうしたら自分の心はどのように反応するのだろうか。充実した人生だったと言えるのだろうか。

ここには確かにソロモンが経験した贅沢と官能と名誉の数々が表されています。彼は 13 年という年月をかけて自分と王女のための豪華な宮殿を建てました（Ｉ列王７章、

[1] ①〔邸宅を〕建てた　②〔ぶどう園を〕造った　③〔庭園を〕しつらえた　④〔池を〕掘った　⑤〔奴隷を〕買い入れた　⑥〔家畜を〕所有した　⑦〔金銀を〕集めた　⑧〔歌い手を〕得た

9:1、10:12、Ⅱ歴代 8:3-6)。ぶどう園は父ダビデが所有していたものがあったようで（Ⅰ歴代 27:27)、おそらくそれを受け継ぎ、更に拡張したのでしょう。庭園は、王や貴族階級の人々の生活を特徴づけるもので、雅歌を読むと様々な種類の木が「ソロモンの庭」に植えられていたことが分かります（4:13)。林を灌漑（かんがい）するための用水池（ソロモンの池）も歴史文書に残っているようで（ヨセフス『ユダヤ戦記』V:4:2)、この広大な庭園を管理するためには多くの奴隷が必要でした。「**男女の奴隷**」というのは外国人の奴隷のこと、「**家で生まれた奴隷**」というのは奴隷の家庭から生まれた子どものことでしょう。「**牛や羊**」はソロモン王宮の日々の食料の中にも出てきますが（Ⅰ列王 5:2-3／新改訳では 4:22-23)、その一日の分量は「**上質の小麦粉三十コル、小麦粉六十コル、肥えた牛十頭、牧場で飼育した牛二十頭、羊百匹であり、その他、鹿、ガゼル、のろじか、肥えた鳥もあった**」といいます。どんな大食漢にもこんなにたくさんは必要ないでしょう。あるいは、その美味しい部分だけを取って食べていたという意味か。「**金銀、財宝**」は、ソロモンが貿易に力を入れ、征服した領地から大量に手に入れたもののことでしょう。「**歌い手**」は宴会のときに用いられた人々で、快楽的生活には欠かせない存在でした。「**側女**」と訳された言葉（שִׁדָּה／シッダー）には多くの説がありますが[2]、ソロモンが700人の王妃と300人の側女を有していたという記録から（Ⅰ列王 11:3)、「快楽の象徴」として「側女」と理解することができるでしょう。

そして、９節では「栄華を極めた」ソロモンを特徴づけるかのように「**偉大な者となり、栄華を手に入れ、知恵もまた私にとどまった**」と言われます。これは彼の名声に関わる部分で、歴代の王だけでなく「**エルサレムにいた誰よりも**」偉大な者となったということ。

私は若かりし頃、アルバイト先で、クリスチャンではない同僚の人から聖書について質問を受けたことがありました。確かイスラエルの王制についての質問だったと思いますが、その方に「ダビデ」という名前を聞いたことがあるかどうかお聞きしましたがご存知なく、しかし「ソロモン」は知っているとおっしゃっていたのを覚えています。

本論３．実験の結果

さて、以上のような経験は、人間誰もができるわけではありません。現在でも、ビルゲイツのように 965 億ドル(10 兆 6,150 億円)という巨万の富を築いている人物はいますが、それは一部の金持ちであって多くの人々は逆立ちしてもそんな資産を得ることはできないのです。ソロモンは資産形成の才能とともに、欲望にブレーキをかけない人生

[2] ①献酌官　②酒杯　③楽器　④荷箱　⑤強奪された女性　⑥側女　（実用聖書注解）

を試みたのです。その結果は聖書が示すとおり、様々な不幸を彼自身と周辺の人々、後代にまでももたらしました。彼の贅沢のために、国民には重税が課せられ、近隣諸国からの奴隷には強制労働が強いられ、そんな中で贅沢三昧をしている王が恨まれないはずはありません。また、多くの妻を持ったことにより、彼の心は主なる神様から離れ、偶像礼拝に陥っていきました。更に、このことによる災いは彼の代では終わらず、次の代でイスラエルは南北に分裂し、災いは末代（まつだい）にまで及んでいきます。

私は当初、ソロモンはやりたいことをあれもこれもやったくせに、最後は「空しい」の一言で片づける態度を許しがたく思っていました。しかし、何度も申し上げるようではありますが、彼は自分が試していく「快楽」の実験にはリスクが伴うことを知りながら、言わば人類を代表して「愚かさ」を突き進んでみたのです。このことから何が分かるかというと、私たち人間の内には共通した欲望が隠れており、それを実現したいという願望が息を潜めているということです（しかし、現実的にはできないことばかり）。では、その願望の一つひとつが実現していったときに、人は幸せになれるかどうかのテストをソロモンはしてみた。その地位と財産と知恵があったからこそできた実験であります。そして、その答えが見つかりました。

> **目が求めるあらゆるものを、私は手中に収めた。私はすべての喜びを享受し、心はすべての労苦を喜んだ。これがすべての労苦から得た私の受ける分であった。だが、私は顧みた。すべての手の業と労苦を。見よ、すべては空であり、風を追うようなことであった。太陽の下に益となるものはない。**（2:10-11）

この箇所は、ソロモンがただのんべんだらりと生きていたのではないことも語っています。そこには「**労苦**」があり、働く喜びも彼は知っていたのです。しかし、彼は自分が生涯かけて築き上げたものが「空しい」という結論に達しました。なぜか。それは、神から離れたところの労苦であったからです。

【結論】

主イエスが言われるように、人は神と富の両方に仕えることはできません（マタイ6:24）。また、多くの異性を愛しながら自分自身を愛することもできません（エペソ5:28）。ソロモンには比類なき知恵が与えられましたが、それは「神から離れた知恵」と変容しました。そして彼は、神から離れ自分の欲望に従い抜く人生の結果を知ったのです。私たちにもソロモンと同じ欲望の根があります。その声に聞き従うのは危険であることも示されています。むしろ、そこから解放され、欲望に従わなくてもよい自由を、神に結びつく人生を通して知っていくことができるのです。

【祈り】

　恵み豊かなる神よ。あなたの許には無限の蓄えがあり、必要なところにはそれをもたらすことがおできになります。しかし、人はその欲望により、必要以上のものを求め、ひたすら自分のためにそれをしまい込もうとします。どこまでも欲望に身を任せたらどうなるかという、リスキーな生き方を貫いた一人の人の人生を見ました。そして、その行き着く先が「虚無」であるということを知りました。私たちには同様の経験をすることはおそらくないでしょう。しかし、自分の内には本来それを達成したいという「願望」が潜んでいることを受け留め、そこからの解放を求めます。神に結びついて歩むところに、まことの自由を見出していくことができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
万物の創造主にして、すべての人の必要を知り給う、父なる神の愛、
罪の奴隷状態、欲望の虜となった人生からも、我らを解放し給う、主イエス・キリストの恵み、
神と結びつくところにこそ、最上の喜びと自由を見出させ給う、聖霊の親しき交わりが、あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。